

# 「羽根と根」／「ぬばたま」 佐藤博之

令和三年十一月の文学フリマ東京に合せ、多くの同人誌の新刊が発行された。数ある同人誌の内、二誌を取り上げたい。

「羽根と根」は平成二十六年に阿波野巧也・佐々木朔・佐伯紺らの学生短歌会の会員を中心に発刊された同人誌で、今回第十号が発行された。十号記念とのことで、創刊の経緯より語り始めて創刊号から前号までを振り返る座談会が圧倒的なボリュームで掲載された他、会員の歌集 阿波野巧也『ビギナーズラック』・橋爪志保『地上絵』の書評が特集された。他、同人の注目作を以下に。

・アイスバーのしつぽのほうを食べようと傾けていく手首や首を  
牛尾今日子「羽根と根」10

棒付きの氷菓を食べる際、無意識に出る行動を的確に詠み込んだ一首。棒の持ち手に近い部分を「しつぽ」と呼ぶ隠喩の親しみやすさが共感性を呼ぶ。結句の倒置された上で手首、首と重ねられる語順が、手首・首と傾けていく順序とどんどん傾いていく様子が感ぜられて面白い。

・なんとなく眠りそびれたあかるさに坊主を袈裟でくるんで捨て  
る  
佐伯 紺「羽根と根」10

ナンセンスな一首。実景とは離れた詩性に大きく飛躍する歌と読んだ。「眠りそびれた」の夢うつつ感から、現実にはあり得ない下句を導く。初句二句のN音、四句結句のK音の頭韻なども含め

た韻律の良さにも好感が持てる。

「ぬばたま」は平成八年生まれの歌人、大橋なぎ咲・乾遥香・初谷むい・久間木志瀬・的野町子・越田勇俊ら、「羽根と根」に比べて2〜4歳ほど若い歌人が結集した同人誌である。同人の特集とのことで、今号は大橋なぎ咲特集として大橋の聯作・自選三十首・同人による十首選・歌人評・聯作評・鼎談・年表などと盛りだくさんの特集が組まれた。他、同人の注目作を以下に。

・あのとときの気持ちの歌がこれからの伏線に見えてきた 私には  
大橋なぎ咲「ぬばたま」6

「待ち合わせから三日間連絡がつかなかったとき聞いた家電」小学校四年の時の一輪車マラソンの記録ネットで見たと「などのタイムラグを詠んだ歌を多くちりばめる聯作の掉尾を締めくくる歌。

「伏線」との小説や脚本の用語を人生に当てはめる様に一首を詠みながらも、聯作としての視点は結果から開始するものである自己矛盾の中から、作者の未来の指針なり希望や絶望が見出せる。

・きみのてくびにひかる静脈ひらいてみたいとおもわないのは  
嘘。  
初谷 むい「ぬばたま」6

耽美的な世界観を大胆な破調と、大胆にひらがなに開く表記で表現。聯作中、「にせもの」「うそつき」「意味はない」と言語的な構築を予め裏切る語を頻出させながら、韻律を超越しつつ虚構を重ねていく詩的跳躍の力強さに惹き込まれていく。

「羽根と根」も「ぬばたま」もそれぞれがその時代の学生短歌会の横の繋がりがから今も活動が続ける若い同人誌である。近いながらも異なるそれぞれの世代間の世界観や詠みぶりの差も垣間見ることができた。若い歌人たちの今後の活躍に期待したい。